



JAPAN  
**APIC**

Since 1975

No.011

7 July  
2020

# CONTENTS

01 ごあいさつ

## 太平洋・カリブ事業

03 太平洋・カリブ記者招待計画 2020

## カリブ事業

07 第5回「ハイチ便り」～ハイチの文化的特色(その2)～  
在ハイチ日本国大使(当時) 八田 善明 氏

## ザビエル留学生奨学金

11 第7期ザビエル留学生・第4期 APIC-MCT 留学生 候補者決定

12 日本語教室 開催中

## 若い世代の育成

13 上智大学よりインターン生の受け入れ実施

14 APIC インターン OB・OG の声

15 APIC 早朝国際情勢講演会

16 APIC 役員名簿／ザビエル高校留学生奨学金制度へのご寄附のお願い

17 APIC 令和2年度事業計画・収支予算

### 今号の表紙写真



マーシャル諸島

撮影者：フロイド・K・タケウチ  
Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

いじめごさし

一般財団法人国際協力推進協会  
理事長

佐藤 嘉恭



パンデミックと宣言された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が猛威を振るい多くの方々が罹患され、また、亡くなられた方々の痛ましい様子が毎日報ぜられ、なんとも居たたまれない数か月でした。心からのお見舞いとともにお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。「緊急事態宣言」が全面的に解除されたとはいえ、まだまだ不安は消え去らず警戒感が続いております。皆様におかれてはくれぐれもご用心され健康にお過ごし頂くよう祈念いたします。

事業への感覚が途切れないよう腐心しました。常務理事、事務局長、スタッフ一同は7月から始まる新年度の事業計画案そのための予算案作成の作業をオンラインで進め、理事の方々のご了解を得て文書議決を了しました。

この間、APIC奨学金制度の下、ザビエル留学生2名及びMCT大学院留学生1名の上智大学／大学院合格が決定し、今秋にお迎えすることとなりました。

人類の歴史は感染症との葛藤の繰り返しであり、その対応には容易ならざる道のりが予想されます。歴史は国際協調・協力の推進こそがその対応の基本であることを教えていると思います。APICの諸事業の前に存在する制約はまだしばらくは続くものと思いますが、COVID-19の終息してゆくことを期待しつつ「新たな日常」を創出してゆく所存です。一層のご支援をお願い致します。

### APICの主な動き [2020年1月～6月]

- 1月 6日 太平洋・カリブ学生招待計画 2020 (～1月31日)
- 1月 16日 第365回早朝国際情勢講演会 (外務審議官(経済) 金杉 憲治氏)
- 2月 20日 第366回早朝国際情勢講演会 (前駐英国特命全権大使 鶴岡 公二氏)



第365回早朝国際情勢講演会にて



APIC事務所を訪れた太平洋・カリブ学生招待計画の参加学生たち

# 太平洋・カリブ 学生招待計画 2020

2020年1月6日から31日までの約1カ月間、太平洋諸国とカリブ諸国の6カ国から合計6名の学生を招待しました。招待学生たちは日本滞在中、上智大学の短期プログラム「January Session in Japanese Studies」に参加しました。

招待学生たちは上智大学にて、日本語を学ぶ必修科目1つと、選択科目として「日本の企業と経済」、「日本におけるメディアと時事」、「日本の教育」、「現在の日本文化と社会」の4科目のうち2つを各自選択し受講しました。それぞれの科目にはフィールドトリップやインタビュー調査、プレゼンテーションなどが組み込まれており、日本の経済や文化、メディア、教育などについて学びました。さらにその間、実際に日本で過ごすことで日本の文化やライフスタイルへの理解を深めました。本招待計画は本年度で5回目の実施となりました。

## ◆交流イベント

APICでは、日本滞在中の生活のサポートに加えて、プログラムをより充実したものにするため、また招待学生と日本人学生同士の国や文化を超え

た交流を促進するために、毎週末に交流イベントを実施しました。

11日には都内観光を行い、東京スカイツリーや浅草などの観光地を巡りました。古くからアクセサリーとして作られてきたとんぼ玉の製作体験を通して、日本の伝統文化や技法などに触れました。とんぼ玉を作る際、学生たちはみな真剣に取り掛かり、それぞれが自分のオリジナルのとんぼ玉キーホルダーを制作しました。中には、完成したキーホルダーを非常に気に入って、プログラム最終日まで肌身離さず持ち歩く学生もいました。学生たちが母国に帰った際にこのプログラムを思い出してもらえらるきっかけになるのではないかと思います。

18日に訪れたお台場では、森ビルデジタルアートミュージアム「エブソンチームラボ ボーダレス」を訪問し、デジタルアートによって作り出された幻想的で美しい空間を体験しました。また、大型のショッピングモールにも行き、様々な店を見て回りました。当日は雨が降り厳しく冷え込みましたが、その後雨が雪に変わると、初めて見る雪に感動する招待学生もいて、その様子がとても印象的でした。

25日に実施した鎌倉観光バスツアー



①②③鎌倉観光の様子 ④浅草観光の様子  
⑤森ビル デジタルアートミュージアム「エブソンチームラボ ボーダレス」訪問

## 今回参加した学生の出身大学・国

氏名	大学	出身国
Oloau Sangoiao Futai	University of the South Pacific	ソロモン諸島
Kalesi Nainoca	University of the South Pacific	フィジー共和国
Kazuko Chibana	Palau Community College	パラオ共和国
Mellisa Walker	University of the West Indies Mona Campus	ジャマイカ
Kyle Shepherd	University of the West Indies Cave Hill Campus	バレーバドス
Tanuja Ramkissoon	University of the West Indies St. Augustine Campus	トリニダード・トバゴ共和国

では、報国寺、鶴岡八幡宮、小町通り、高徳院、長谷寺を訪れ、日本の歴史を学ぶとともに、神社やお寺をめぐるその文化について学びました。また、この鎌倉視察が日本で過ごす最後の週末となったため、名残惜しそうな招待学生たちの様子も伺えました。

これらの週末交流イベントには、招待学生をサポートするために、APICが過去に実施した「ミクロネシア・エクスポージャーツアー」の参加者や、APICでのインターン経験者など多くの学生がボランティアとして参加しました。文化や国、言葉の垣根を越えた交流が学生たちにとって異文化のみならず、自国の文化へのさらなる理解、さらに国境を超えた人脈づくりにも繋がることを願っています。

## 参加した学生の声

プログラムに参加した6名の学生のうち、2名の感想文を掲載しています。(APIC和訳)



フィジーより

### カレシ・ナイノカさん Kalesi Nainoca

南太平洋大学  
University of the South Pacific

日本での経験は私の人生にとっても大きな影響を与えてくれました。私はこの経験を一生忘れることなく、大切にします。

10年前、私の人生はまるでジェットコースターのようでした。私は若くして結婚し、子供を授かったのですが、当時私が思い描いていた夢や希望は諦めざるをえませんでした。しかし今回、フィジーから太平洋を超え、7,000キロの距離を経て日本に来る機会を与えてくれた「教育」には計り知れないほどの力があると確信しました。APICは太平洋・カリブの学生たちに日本のユニークな文化について広く学ぶ機会を与えてくれました。

日本に到着してすぐ、私は様々なものに釘付けになりました。というのも私の目は東京の全てが大きく、そして母国と比べてとても先進的な光景が飛び込んできたからです。空港や道路、建物、リムジンバス、電車はとても大きく、いまだかつてないほど私の心が高まったことを覚えています。最初に学んだ日本文化は「お辞儀」でした。頭をさげることにより、日本ではそれがあいさつ、尊敬、謝罪、感謝などたくさんあることを表す動作だということを知りました。このお辞儀の習慣はあらゆるところで見ることができたため、私もすぐに慣れ、親切にされたときには迷わずお辞儀をしてお礼をしました。東京を散策する中で非

## ◆過去のプログラム参加生によるプレゼンテーション

今回はさらに、過去に本招待計画に参加したことがきっかけとなり、帰国後再び日本を訪れているボビー・スウカー (Bobby Sookoo) さんとカイル・アリ (Khair Ali) さんの2名がプログラムに協力してくれました。ボビーさんは2017年に実施した本招待計画に参加後、「国費外国人留学生」として現在、日本の大学院で学んでいます。そしてカイルさんは同年の招待計画に参加後、日本全国の学校等で外国語教育や国際交流のために働く「JETプログラム」参加者として再び来日し、



カイルさんによるプレゼンテーションの様子

現在は熊本県の学校で英語を教えています。

「January Session in Japanese Studies」の修了生で、かつ現役のJETプログラム参加者であるカイルさんには、自らの経験を共有するプレゼンテーションの機会を設けました。このプレゼンテーションでは、対象をAPIC招待学生に限定せず、他のJanuary Session受講生からも、広く参加を募りました。カイルさんからはJanuary Sessionで勉強する意義と、そこで得た経験やつながりを大切に努力し続けることが重要であるとの話がありました。そしてJETプログラムの参加者として、その概要と3つの職種について紹介したのち、詳しい応募の要件や方法について説明しました。最後には質疑応答の時間を設けて個別に質問に応じるとともに、終了後も学生たちとざっくばらんに情報交換をしました。このプレゼンテーションの機会は、招待学生が卒業後の進路の候補の一つとして日本を考えるうえで、非常に有意義な場となりました。

なお、過去の「太平洋・カリブ学生招待計画」によって来日し上智大学のJanuary Sessionに参加した学生のうち、これまでに累計4名が再来日し



報告会にて

本での大学・大学院進学あるいは就職を果たしています。

## ◆報告会・フェアウェルパーティ

プログラム最終日には、日本滞在中の活動報告・成果発表のため、上智大学にて報告会・フェアウェルパーティが開催されました。当日はまず、APIC荒木理事・事務局長よりプログラム修了証が学生ひとりひとりに手渡されました。その後、学生たちによるプレゼンテーションが行われました。それぞれが日本で学んだことや感じたことについて語り、まさか自分が日本に來られることになるとは思ってもいな



フェアウェルパーティで学生に向けて講評をするアリコック大使 (左端)

かったと、プログラムに参加できたことへの感謝の気持ちを表しました。その後のフェアウェルパーティでは、学生たちの発表を聞いていたアリコック駐日ジャマイカ大使から、学生ひとりひとりに発表の内容を踏まえた講評が伝えられました。アリコック大使は、それぞれの学生が得た経験や学びについて言及し、プログラム修了をたたえてエールを送りました。その後、正本謙一外務省中南米局中米カリブ課長よりご挨拶と乾杯の発声がありました。学生たちは残り少ない滞在時間を惜しみながら、日本でできた仲間たちとの交流を楽しんでいました。(文責:松並)



報告会でプログラム修了証を受け取るカレシさん (左)

常に驚いたのは街がとても綺麗なこと、3週間半後にはこの綺麗な環境に私自身も慣れ、自然と環境に気がつかっていたことに気付きました。この発見を通じて、私個人が行動に責任を持つことにより、環境や社会全体を良くすることに大きな影響があることを学びました。これは私が母国フィジーに持ち帰った大切なものの一つです。

まだまだ書き記しておきたいことがたくさんありますが、全部書こうとすると本をかけるくらいになってしまうので、この辺で止めておくことにします。日本は私にとっていつまでもインスピレーションの源であり、大きな考えや夢を持ち、信じていること、そしてそれが実際に大きな結果を残すことを私に教えてくれました。この旅は確実に、私の子どもたちや家族に、外の世界から得られるものがたくさんあるという希望を与えてくれました。日本での生活は短くも、とても充実したものであり、人生が変わるような経験をたくさん得ることができました。APICの皆様に感謝申し上げます。日本は私の心の中でいつもでも特別な国であります。



バルバドスより

### カイル・シエパードさん Kyle Shepherd

西インド諸島大学ケイヒル校  
University of the West Indies (Cave Hill Campus)

今回のAPIC太平洋・カリブ学生招待計画は規模を縮小して実施され、私は各国から推薦された6名の学生の1人として参加しました。皆とは仲良くなるまでにさほど時間がかからず、日々の授業や生活を通して彼らは私にとって家族のような存在となっていきました。初めは日本という国に圧倒されたようになり、たが、APICのスタッフの方々が親身にサポートしてくれました。将来このプログラムに参加する学生たちに対しては、東京での生活を十分に楽しむために、できるだけ早く地下鉄の使い方に慣れることをお勧めしたいです。そうすれば、東京での生活は間違いなく人生がガラリと変わるような機会になると思います。

東京に滞在し、日本の文化や料理、学校生活を体験したことは、私が日本の大学院への進学を真剣に検討するほど強烈な印象を与えました。上智大学で勉強できたことはとても光栄なことでした。日本についてあらゆる角度から学び、その文化やライフスタイルをより深く理解することができました。大学の講義で出されたたくさんの課題と、東京の街をもっと冒険したいという思いとの間

で板挟みになることもありましたが、自分で選択した科目を修了できて良かったです。講義を担当してくれた先生たちはそれぞれ違った教え方をしていました。みな豊富な知識と経験を持っており、学生とのコミュニケーションを心から楽しんでいました。たった3週間の授業でしたが、たくさんのことを学びました。これからも学びを深め、広げていきたいと思っています。

このプログラムは私の人生を変えました。私をこのプログラムに参加させてくれたAPICには感謝してもしきれません。今回の旅では初めて母国バルバドスを離れ海外に行きましたが、日本を発つ時には同じように自分の家を発つような気持ちになりました。本当にありがとうございました。いつかまた皆さんと会えることを楽しみにしています。



週末交流イベントでのカイルさん (手前左)



# 第5回「ハイチ便り」

ハイチの文化的特色 (その2)  
～ハイチの伝統建築ジンジャーブレッド様式～

寄稿：在ハイチ日本国大使 (当時) 八田 善明



APIC ウェブサイトでは、八田善明 在ハイチ日本国大使 (当時) 寄稿の連続コラム「ハイチ便り」を配信しております。日本で知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本ページでは、第5回「ハイチ便り」の内容を掲載していません (2018年時点での執筆記事)。その他の「ハイチ便り」については、APIC ウェブサイト (<http://www.apic.or.jp/projects/haiti000.html>) をご覧ください。

## ■ジンジャーブレッド様式建築とは

ハイチには、通称「ジンジャーブレッド様式」と呼ばれる独自の建築があります。同様式は、植民地時代や独立当時から存在していたというほど古いものではなく、19世紀後半以降比較的短期間に富裕層を中心に住居として定着したのですが、100年以上を経過した今、国家的な遺産として積極的な維持に取り組みなければならぬ状況にあります。

## 【特徴】

ジンジャーブレッド様式は、とんがり屋根の塔屋や大きく傾斜した屋根等のスタイルを持つ建築で、屋根の縁(破風等)には木によるレース模様(ジンジャーブレッド装飾)があしらわれ、正面には時として通し柱があるような広いヴェランダがある、装飾的なかわいいた建築です。純粹に木造建築のものもあれば、石造りとの混成やコンクリートと木造の混成建築もあります。

機能的に見てもよくできており、天井は高めに取られ、塔のようにさらに高めに作られた屋根により熱い空気を上へ逃がす構造になっています。各方面に設けられた窓や室内のドア等には木製のルーバーが設けられ、日差しは



ポルトープランス Oloffson Hotel 正面

避けつつも風が建物を吹き抜ける構造となっています。開口部を大きく覆うように配置されたヴェランダも強い日射から居室を守っています。

## 【起源】

2010年の首都圏における大震災の後にジンジャーブレッド様式建築の調査/目録作りを行った文化団体の F O K A L (Fondasyon Konesans Ak Libète) と米国のコロンビア大学、W M F (World Monument Fund: ワールド・モニュメント財団)等の共同による報告にも詳しく触れられています。1860年代のポルトープランス



ポルトープランス Villa Miramar (マクシミリアン設計)

港を中心とした貿易・経済の発展と共に富裕層が興り、手狭になった従来のポルトープランス市街からほど近い緑多き丘の斜面へと住居を移し、その際に時の欧州での流行や地元での様式等を融合しながら作り上げたのが走りとなります。

その後、1881年に建築されたハイチ史上2つ目になる大統領官邸がこの様式の起源と捉えられ、一つのモデルとなりました。この頃には代表的な建物の一つであるヴィラ・サム(現オロフソン・ホテル (Hotel Oloffson))等も建築されています。

また、1895年には3人のハイチ人建築家、ボーサン (Georges BAUSSAN)、マトン (Léon MATHON) 及びマクシミリアン (Joseph-Eugène MAXIMILIEN)らがパリ(フランス)を訪れ、当時の主流であった建築を学び、ハイチに持って帰り、ハイチでの要請と統合して独自のスタイルを作り上げていきました。

丁度この時代に装飾手法の合理化や廉価版も出回る等して、富裕層だけでなく、次第に庶民に広まっていきました。

なお、ジンジャーブレッド様式の大統領官邸は、残念なことに1912年8月8日の大統領官邸地下火薬庫における爆発により、サンシナトゥス・ルコント第21代大統領ほかの命と共に終止符を打ち、新しい建築による大統領官邸に生まれ変わり、今はその面影すら残っていません。

【所在】 同様式の建築が最も集中している首都ポルトープランスでは、特にボワ・ヴェルナ (Bois Verna)、テュルジョー (Turgéau)、パコ (Paot) やデプレ (Deprez)、バ・プー・ド・シヨール (Bas Peu de Chose) 辺りの地区に多く見られます。老朽化と2010年の大震災で損壊してそのまま修復もされずに放置されているものもあり大変残念で

## ■ジンジャーブレッド様式と他の建築様式

ジンジャーブレッド様式は、他の建築様式と比べられる点多々あります。が、なかなか単純にこの流派の建築という風にならないように思われます。

例えば、正面に奥行きのある、時として地上階からの通し柱が何本もあるヴェランダがファサードの意匠となっていることが多いという点では、似たようなヴェランダを持つコロニアル様式的とも言えそうですが、当該部分の装飾の点でもコロニアルの方が遙かに簡素であり、その他の類似点に乏しいとも言えそうです。

とがった屋根を持ち、装飾面における幾つかの特徴の面で似ているのは、ヴィクトリア様式でしょう。なお、装飾的な面での類似点は必ずしも建築様式としての類似性までを決めるものではありませんが、そもそも時代自体も被っており、また、ヴィクトリア様式

の時代自体が多くの過去の建築様式の部分的導入による復古形式のようなものが発展したもの(折衷主義建築)なので、部分的影響が相互に見られるのも自然なことと言えます。

例えば英国でのヴィクトリア様式がフランス等の欧州大陸での様式や米国でのヴィクトリア様式へと広がり、そこで一定の別の様式が統合されて新たな流れの基礎ができてきます。この大西洋を隔てた土地で育ったアメリカン・ヴィクトリア様式の要素やハイチ人建築家がフランスから持ち帰った様式(これもフランスでの折衷主義的な流れ)等がハイチにおける独自の気候的な要請も加味され融合したものと見ることができそうです。

## ■「ジンジャーブレッド」とは

そもそも、なぜフランス語・クレオール語圏ハイチの建築様式に英語の「ジンジャーブレッド」の名前が付いているのか。そう思うのは私だけではないのではないのでしょうか。掘り下げて調べて見ました。

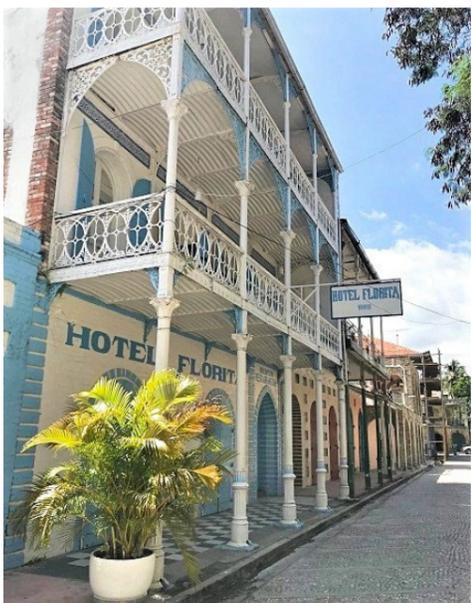
少し遠回りになりますが、先ず糸鋸(いとのこ)の実用化と関係がありそうです。おそらくこの記事をお読みの方の中学生時代に技術家庭科の木工の授

業(一昔前は男子のみでした)等で御世話になった糸鋸です。この糸鋸(英語: Jigsaw, Scroll Saw, フランス語: Scie à Chantourner, Scie à ruban)は、(古くは15世紀まで遡るといいますが)19世紀前半に英国その他欧州で次第に広がり、1860年代以降は米国でも足踏み式等の機械式に、そして1900年代には動力式へと発展し、木の板に複雑な透かし彫りを施すことが容易になりました。フランスでも建築装飾(Lambrequin)用の素材として大いに広まったほか、この技術に支えられて、主に欧州の影響が米国に与えた建築様式とそれらの簡便な装飾技術によって米国各地にも浸透していきます。具体的には、欧州のゴシック的な要素やモチーフを大工的・木工的に再現・量産しながら建物の意匠に取り入れていきました。オリジナルの欧州のゴシック建築の装飾は石を掘った彫刻でそう簡単に取り入れることはできませんでしたが、広まりつつある糸鋸を用いて、素材は木材にて破風板・妻壁、軒下、アーチ飾り、手すり等に応用し装飾材として取り入れていったのです。当初米国ではスティック・スタイルと呼ばれる建築等にて使われた後、ゴシック・リバイバルの木造建築版として、いわゆる

「ジンジャーブレッド装飾 (Gingerbread Trim)」として庶民の家の装飾にも広がっていききました。これがアメリカン・ヴィクトリア様式の一部として、一つの要素であり特徴となっています。

こうしたバックグラウンドを有する米国人の観光客が1950年代にハイチに来た際に目にした特徴的な建築と装飾にアメリカのジンジャーブレッド装飾を重ね、ジンジャーブレッド・ハウスと呼ばれるのがハイチにおけるジンジャーブレッド建築の呼称の始まりと言われています。

なお、アメリカで、木製の透かし模様の装飾等をジンジャーブレッド装飾ということとは解りましたが、そもそもなぜ「ジンジャーブレッド」というのか？もう少しさらに掘り下げてみると、欧州の伝統的なケーキの一種であるジンジャーブレッドをベースにしたつ、古くはドイツ等を中心にジンジャーブレッドや御菓子で飾りたてるジンジャーブレッド・ハウスの習慣が広がり、米国のもたらされ広がったことも背景にありそうです。「ヘンゼルとグレーテル」の童話にも出てくるような「御菓子の家」のイメージも手伝って、米国での木材の透かし模様を用いてヴィクトリア様式の家に多くの装飾



南東ジャクメル市フロリタホテルの特徴的なバルコンの建築

■ジンジャーブレッド建築の修復と維持  
これまで紹介してきたハイチ独自の文化遺産と言えるジンジャーブレッド様式建築の多くは建築から100年以上が経過し、老朽化や手入れの不備、そしてハリケーンや大地震といった災害被害により大きくダメージを受けているものが少なくなく、このまま放置すればその現存数の行方に危機感を持たざるを得ない状況にあります。

また、所有者が個人であること等により十分な修繕・維持経費がかけられないといった事情や、未だ国内での重要文化財的な保護指定を受けていないこともあり、人々の良心と努力に任されているのが現状と言えます。なお、政府としては社会経済的な優先課題が

を施すこと、その装飾自体をジンジャーブレッド装飾と呼ぶようになったようです。

■日本の建築との関係

時代的に見ると、ハイチでジンジャーブレッド建築が盛んであった頃は、丁度日本では明治時代で、いわゆる洋館(異人館)が流行った時代でもあります。ジンジャーブレッド様式に対して地球の裏側ほど遠くの日本の様子を比べるのはやや無理がありそうですが、多くの日本の洋館が英国からの影響を受けていた中であって、(個人的には)例えば旧西郷従道邸(現在は明治村に所在)はフランス人建築家の設計ということもあって、バルコニー辺りには何か似たような空気が感じられます。

また、横浜の旧外交官の家である内田定槌邸は1910年にアメリカ人建築家のジェームズ・マクドナルド・ガーディーナー設計による(アメリカン)ヴィクトリア様式ですが、装飾面ではかなりシンプルなもの全体の趣としては何か遠く通ずるものがあります。

■衰退

せっかく内外の様々な要素を組み入れてできたのがあった様式ですが、1925

山積する中、果たして保護指定を行うことや公的所有に移行することが最適解であるかというところはそれで難しい面も多々ありそうです。

現状は、国内外の関心を高め、少しでも維持することについて、現所有者を含めた意識を高めつつ、修復努力と付加価値を進めていくことに注力することになるのかと思われます。

現在、ハイチ国内における同活動の担い手の中心は、冒頭にも触れたハイチでの文化関連団体であるFOKALであり、かねてからジンジャーブレッド建築の歴史的意義とその維持に関連した活動を展開してきましたが、2010年の震災によりさらに同関与を加速し、WMFやISPAN(ハイチ国家遺産保護機関)らとも共同で、最も同建築が密な地域を指定し、ジンジャーブレッド建築の現状調査を行い、既存の建物の登録・目録化を行う等してきています。

また、併せて同建築様式のデュフォール邸(Maison DUFORT)において同

年に火災予防の観点からポルトープランス市長により木造建築が禁止されて以来、市内での新築の多くがコンクリート建築へ移行してしまい、ジンジャーブレッド様式は既存の建物を中心に残すほかは、ほぼ淘汰されてしまいました。

木造建築は一定の手を入れていけば長持ちするのですが、財政的にも厳しい中で震災後には修復もできずに空き家になったまま朽ちているものもあり、土地の有効利用の観点から撤去されたものも数多くあるとのことでした。

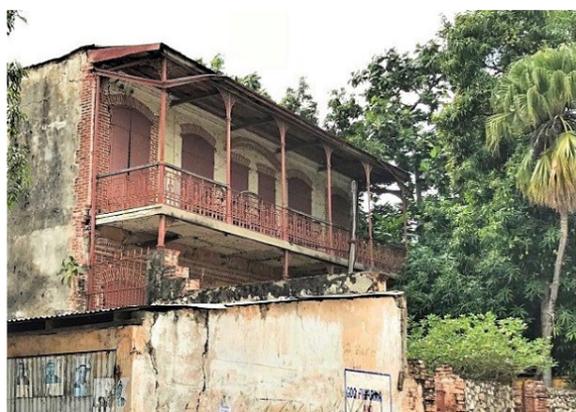
現実的な面では、建築した当初はブルジョワであったとしてもその子供の代にそれらの維持管理が難しくなることはままあり、また、子供の数の多さも相続面で話を複雑にしているということ。かくして、ジンジャーブレッド様式の直接的なピークは、1860年代〜1925年前後までの間であったということになります。その後モニュメンタルに要素が取り入れられた例もあるとは思いますが、完全に復活した建築はあまりなさそうです。

■広がり

ジンジャーブレッド建築は、主に首都圏に集中していますが、近隣のレオ

建物の修復を通じてのワークショップ型トレーニング活動を展開し、コンクリート建築に移行する前の建築技術や素材・加工技術等の再習得を目指し、2016年には同プログラムを終えて次のプログラムに移行しています。

FOKALの代表であるピエール・ルイ(Mme. Michèle D. PIERRE-LOUIS)氏(元ハイチ首相)や事務局長マンゴネス(Mme. Lorraine MANGONES)氏、そして建築プログラム責任者であるイポリット(Mme. Farah F. HYPPOLITE)氏とお話する機会がありました。ジンジャーブレッド様式の密集地である対象地区について、地区全体として一体感を



ジャクメル 震災後に放置されている建物

ガン(Leogane)市等にも見られます(このコラムの初回の挿入写真「地震の痕」の建物は、レオガンのものです)。なお、ジェレミー(Jeremie)市、レ・カイ(Les Cayes)市、カッパシアン(Cap-Haïtien)市や南東部のジャクメル(Jamei)にもやや似たような建築が見られますが、コニアル風等の一定のスタイルはあるもののジンジャーブレッド様式と言えるのは定かではありません。

例えばジャクメル市の建築は、一部にジンジャーブレッド建築だという人もいますがそうではなく、例えば代表的なフロリタ・ホテルは1888年に建築されたもので、むしろ米国のニューオーリンズのフレンチ・クォーターに見られるクレオール・タウンハウス以降のスタイル(1790〜1850)に近いものと見受けられます。歩道に突き出たバルコニー/ヴェランダは木製の透彫模様のもとは異なり、铸铁の柱と装飾で飾られており、スペイン様式が取り込まれたもので、時代もスタイルもジンジャーブレッド様式とは画す印象です。ちなみに、ジャクメルの同建築は、WMFから、2010年のポルトープランスのジンジャーブレッド建築とは別に2012年の危機遺産リストに認定されています。

持つて修復を進め、カフェ(喫茶店)やブティックなどもある散策できるような街に育てたいとの強い気持ちがあるのがうかがえました。修復プログラムの説明等でも協力をいただいたFOKALに敬意を表しつつ、このジンジャーブレッド様式がハイチの発展と一体化して維持され、そして発展することを願わずにはられません。

(※写真は筆者が撮影)  
(※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。)



ポルトープランス FOKAL が修復中の2つ目のジンジャーブレッド シェネ邸



## 日本語教室 開催中



2019年の秋学期より、ミクロネシア地域からAPICの奨学金制度を利用して来日している留学生を対象とした日本語教室が始まりました。

この教室は、日本で生活しているものの、実践的な日本語を学ぶ機会が少ないザビエル留学生やMCT留学生のために、週に1回、放課後にAPIC事務所にて日本語を勉強する機会を設け、読み書きや会話のスキルなどを向上させることを目的として開催しています。講師には、JICAのシニアボランティアとしてザビエル高校（ミクロネシア連邦チューク州）で2年間日本語を教えていた石原晴次先生を迎え、みんなで和気あいあいと日本語を勉強しています。

授業は2回座学を行った後に1回アクティビティを行う形式となっております。アクティビティでは座学で学んだフレーズや単語を実際に使う機会を設けています。留学生たちは店で買い物をする際や、人に道を尋ねる際に使うフレーズなど実践的な日本語を学び、練習し、身に着けることを楽しんでいました。その他のアクティビティとして



で、日本文化や季節のイベントを体験するために、週末に高尾山へハイキングに行つて紅葉を楽しんだり、1月の最初の授業で百人一首や坊主めくりをしたりし、教室の内外で自分たちだけではなかなかできないような経験をしています。

普段の授業や寮では英語を話している留学生たちにとって、同じミクロネシア地域からの学生とともに日本語を勉強できる機会は貴重であり、お互いに刺激しあいながら語学を勉強している姿はAPICにとっても嬉しい光景です。

## ザビエル留学生・APIC-MCT 留学生

上智大学では、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年春学期の授業を全面的にオンラインで実施することになりました。ザビエル留学生・APIC-MCT留学生たちも例外ではなく、みな自分の国から、もしくは寮からオンライン授業を受講しています。

### 第7期ザビエル留学生・ 第4期APIC・MCT留学生候補者決定

2020年度入学の第7期ザビエル留学生として、ミクロネシア連邦出身のアンペリーナ・マイカル・ジョンソン (Ampeleina Maikal Johnson) さんと、パラオ出身のカトー・レメリーク (Kato Remelik) さんの合格が決定しました。アンペリーナさんは上智大学総合人間科学部に入学し、2020年度秋学期より新設される英語による学位取得プログラム「Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)」で学位の取得を目指します。カトーさんは同大学国際教養学部に入学生し、2名ともこれから4年間の留学生生活を送ります。

「ザビエル留学生奨学金」は2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦チューク州にあるザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学へと留学生を派遣するプログラムです。これまで計7

名の学生が本奨学金制度によって上智大学に入学し、昨年度までに2名が卒業しました。

また、2020年度入学の第4期APIC・MCT留学生としてミクロネシア連邦出身のダーラ・ヤッティルマン (Darla Yatilman) さんの合格が決定しました。ダーラさんは上智大学大学院地球環境学研究所に入学し、これから2年間の留学生生活を送ります。

「APIC・MCT留学生奨学金制度」は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust (MCT))・APICの三者間の合意に基づき、ミクロネシア3カ国から留学生を毎年2名派遣し、上智大学大学院地球環境学研究所で修士号を取得するプログラムです。2017年にプログラムが開始され、これまでに6名の学生が入学し、昨年度までに2名が卒業しました。

#### 第4期 APIC-MCT 留学生



ダーラ・ヤッティルマン さん  
Darla Yatilman

#### 第7期ザビエル留学生



カトー・レメリーク さん  
Kato Remelik



アンペリーナ・マイカル・ジョンソン さん  
Ampeleina Maikal Johnson

# インターン生の

# 受け入れ実施



APIC 佐藤理事長（左）とインターン生の松並さん（右）

APICと上智大学の間の教育連携に係る包括的な協定 (Memorandum of Understanding) に基づき、上智大学の「グローバル・インターンシップ（長期）」の就業体験として、2019年10月から2020年2月にかけて1名のインターン生がAPICでの実習を行いました。

上智大学のグローバル・インターンシップ（長期）科目の実習先の一つとしてAPICでは今回、秋

学期の間を実習期間とし、就業体験を行いました。このインターン科目は、実習と併せて事前・事後講義への出席や課題提出を行うことで単位が付与される、上智大学の正式な授業科目のひとつです。APICでの実習期間中、インターン生は電話・来客対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や外国からの要人招待の際のアテンド補助など、様々な業務を体験します。

## インターンを終えて

上智大学 外国語学部3年 松並 佑芽 さん

今回、国際協力推進協会（APIC）でのインターンシップでは、実に様々な業務に携わらせていただき、大学に在るだけでは学べない多くのことを経験し、学ぶことができました。

私にとって特に大きな学びだったのは、国際協力の方法は一つではないということを実際にAPICでの業務を通して肌で感じることができたことです。今まで私にとって国際協力というと大きく抽象的な概念で、発展途上国の人々に人道的な援助や物質的な支援を提供することを思い浮かべていました。しかし実際には、国際協力の在り方や課題へのアプローチの仕方は幅広く、その方法は一つだけではないということを感じました。それと同時に、国際協力は行政機関だけでなく一般企業やAPICのような財団法人

など様々な団体が各々役目を担い、互いに協力して成り立っている、ということを実践の場で見て学びました。

国際協力事業はすべてが必ずしもすぐに成果が目に見えてわかるわけではなく、お互いの国への理解を深め、



インターン期間中に参加したイベントの様子

現地の人々との信頼関係を構築することも小さな進歩であるということ、またこのように一見地道に見えるものこそが、ある意味「国際協力」の根幹となっているのではないかと感じました。そのような国際協力の根幹となる事業を行うAPICでインターンシップをさせていただいたことに心よりお礼を申し上げます。

また、今回、実際に「働く」という経験をさせていただき、社会人としての在り方やその責任について、さらにプロジェクトの企画を進める際の段取りやマナーなども学ぶことができました。末筆ではございますが、お忙しい中、様々な業務に携わらせていただく機会をくださったAPICの皆様、また上智大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

だろうか」「こんな仕事を任せられているだろうか」と思うことが度々あったので、思い出も兼ねて、いくつか紹介したいと思います。

一つ目は、国内外からの来客のアテンドや会報誌用のインタビューなどで、様々な団体や会社に行き、多様な方々のお話を聞かせていただいたことです。APIC内でも、日本国大使として活躍していた上司や大企業の一員または役員として活躍していた（している）上司から直接、貴重なお話を聞くことができるのですが、更に、他分野で活躍している方々ともお会いする機会もいただけたのは、とても楽しかったです。大学在学中に就活をする学生にとっては、特に貴重な経験になると思います。

二つ目は、インターン生ながらに、一つのプロジェクトで、一つの役割を与えていただいていたことです。私が参加させていただいたプロジェクトはいくつかあるのですが、ここではバルバドスにある大学の学長の招聘プロジェクトについて少し触れたいと思います。このプロジェクトに関しては、招聘日程決めや、航空券や宿泊先の手配などの工程から実際に来日してからのアテンド、そして報告書作成などの最終工程まで関わらせていただきました。それまでは、各プロジェクトを断片的にお手伝いさせていただいて

いただけなので、一つのプロジェクトを成功させることの大変さやチームワークの重要性を身をもって実感したプロジェクトでした。

特に印象的だったのは、来日以前の過程で、関係各所との密な連絡のやり取りです。来日中のスケジュール調整では、訪問先との日程調整を行います。未確定事項や確認中事項を待ちながらも、ある程度の柔軟性も持たせつつ、他のスケジュールを固めていかなければいけないという難しさがありました。

慌ただしい準備期間を経て、学長の来日はあっという間に終わりました。来日自体がプロジェクトの終了ではないですが、手探りの中準備していたことが形になるのは、とても達成感がありました。一つのプロジェクトにチームの一員として、最初から最後まで関わらせていただけることはAPICならではの経験です。

このような経験は、長期インターンだからその利点だと思います。元々私は、APICの活動分野に関してほとんど知識も経験もありませんでしたが、インターンシップを通して、学びを得ることができました。また、分野を超えて共通である、チームとしての働き方も学ぶことができました。大学生の拙い私を一から指導してくださったAPICの皆さまには心から感謝しております。



APICではグローバル人材育成の一環として長期インターン生を受け入れています。今回は、長期インターン生としてAPICの事業に携わってきた松尾彩花さん（国際基督教大学卒業）に、印象に残っているプロジェクトや、大学卒業後の進路について聞きました。



米国パデュー大学大学院 言語文化学科 日本語教育学専攻 松尾彩花 さん

私は大学生の時に、大使館や政治系の組織に学生インターンを派遣する財団に所属していました。そこで知り合った先輩の紹介でAPICでインターンシップをさせていただくことになりました。私がAPICでインターン生として働かせていただいたのは、大学3年生から卒業までの約2年間です。それまでは、ろくにアルバイトもしたことがなく、オフィスで働く経験など皆無でした。APICでの経験は、大学生だった私に「働く」ということを含め、多くの学びや気づきを与えてくれました。特に、大学では国際交流や国際政治などはほど遠い分野を専攻していたので、APICでの経験は学校では得ることができない特別なものでした。

初歩的なことかもしれませんが、APICに入ってまず学んだことは、オフィスの服装や、立ち居振る舞い、コミュニケーションの取り方などでした。社会人にとっては当たり前のことですが、大学生が社会に出る前や就活をする前にこのような実践的な指導をしてもらえるのはとても有意義なことだと感じました。また、APICでは、インターン生にも事務所内での業務のみならず、外部への訪問にも積極的に同行する機会を提供する教育システムが構築されていると感じました。「こんなところに私がいいの

# APIC 役員名簿 (2020年7月1日現在)

## ◆ 役員

理事長	佐藤 嘉恭	(最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使)
常務理事	佐藤 昭治	(最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使 (兼パラオ・マーシャル諸島))
理事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 事務局長 (最終官職：財務省 国際局付派遣職員 (アジア開発銀行))
理事	今野 秀洋	一般財団法人貿易・産業協力振興財団 理事長 (最終官職：経済産業審議官)
理事	重家 俊範	東レ株式会社 顧問 (最終官職：駐大韓民国特命全権大使)
理事	芳賀 達也	一般社団法人太平洋協会 事務局長
理事	鳥飼 玖美子	一般財団法人港区国際交流協会 理事長
理事	村上 洋	味の素株式会社 社外監査役
理事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	金成 憲道	ドイツ証券株式会社 元取締役会長
監事	吉川 英一	三菱UFJ銀行 顧問

## ◆ 評議員

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長 (最終官職：通商産業省 通商産業審議官)
評議員	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
評議員	洪澤 健	コモンズ投信株式会社 取締役会長
評議員	島内 憲	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評議員	舟木 いさ子	ヤクモ株式会社 取締役
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

## ご寄附のお願い

「ザビエル高校留学生奨学金制度」は、上智大学の留学生基金の他、皆様の APIC へのご寄附により、2020年6月現在、総額約8,858万円をお預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。皆様に御礼申し上げますとともに、本留学生奨学金制度への更なるご支援をお願いいたします。

**対象** ザビエル高校卒業生 毎年1~2名

**留学先** 上智大学国際教養学部 / 理工学部英語コース / Sophia Program for Sustainable Futures (SPSF)\*  
\*2020年度秋学期新設

**奨学金** 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆様からのご協力をお願い申し上げます。

**銀行振込先**

三菱UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座 1660339  
口座名：一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口  
カナ名：ザイ) コクサイ キョウリヨク スイシン キョウカイ  
※振込手数料はご負担をお願いしております。

**ザビエル高校 (Xavier High School) とは...**

1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約150名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、過去の卒業生には、モリ元大統領やクリスチャン元大統領をはじめ、この地域の境界・経済界のリーダーを輩出しています。

# APIC 早朝国際情勢講演会



2020年1月16日、ホテルオークラ東京において、金杉憲治外務審議官(経済)を講師としてお迎えし、「2020年の日本外交―課題と展望―」という演題の下、第365回APIC早朝国際情勢講演会が開催されました。

また、同年2月20日には鶴岡公二前駐英国特命全権大使を講師としてお迎えし、「EUを離脱する英国―その影響と日英関係の展望―」という演題の下、第366回APIC早朝国際情勢講演会が開催されました。

それぞれ講演の後には質疑応答の時間が設けられ、活発な意見交換が行われました。

毎月1回(8月以外)開催されるAPIC早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師としてお迎えし、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。現職の外務事務次官や外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。本講演は、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細につきましては、本誌裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。



前駐英国特命全権大使  
鶴岡 公二 氏

### 略歴 (2020年2月現在)

- 1976年 東京大学法学部第二類卒業
- 同年 外務省入省
- 1982年 条約局条約課課長補佐
- 1986年 在ソヴィエト連邦日本国大使館一等書記官
- 1988年 在アメリカ合衆国日本国大使館一等書記官
- 1991年 経済局国際経済第一課企画官
- 1994年 条約局法規課長
- 1996年 北米局北米第二課長
- 1998年 北米局北米第一課長
- 2000年 在インドネシア日本国大使館公使
- 2002年 政策研究大学院大学大学院政策研究科教授
- 2003年 総合外交政策局参事官
- 2004年 同審議官
- 2006年 地球規模課題審議官
- 2008年 国際法局長
- 2010年 総合外交政策局長
- 2012年 外務審議官
- 2013年 内閣官房TPP政府対策本部首席交渉官
- 同年 環太平洋パートナーシップ協定交渉に参加するための日本政府代表 / 大使
- 2016年 駐英国日本国大使
- 2019年 退官



外務審議官(経済)  
金杉 憲治 氏

### 略歴 (2020年1月現在)

- 1982年 外務公務員採用上級試験合格
- 1983年 一橋大学法学部卒業
- 外務省入省
- 1999年 総合外交政策局総務課企画官
- 2001年 事務次官秘書官
- 2002年 総合外交政策局総務課企画官
- 北米局北米第二課長
- 2003年 外務大臣秘書官
- 2004年 北米局北米第二課長
- 2005年 在アメリカ合衆国日本国大使館 参事官
- 2007年 大臣官房人事課長
- 2009年 大臣官房総務課長
- 2011年 内閣総理大臣秘書官
- 2013年 アジア大洋州局、南部アジア部 参事官
- 同年 アジア大洋州局、南部アジア部 審議官
- 2014年 在韓民国日本国大使館 公使
- 2015年 経済局長
- 2016年 アジア大洋州局長
- 2019年 外務審議官



## 令和2年度事業計画 (簡略版)

2020年6月8日に実施された書面決議による理事会において、令和2年度(2020年7月1日から2021年6月30日まで)の【事業計画】及び【収支予算】が以下のとおり承認されました。詳細につきましてはAPICホームページをご覧ください。

**1. 太平洋島嶼国開発協力事業**  
太平洋島嶼国との信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「太平洋島嶼国開発協力基金」を活用して、太平洋島嶼国の環境・エネルギー・観光の分野における開発協力事業として、外務省アジア大洋州局大洋州課と協議も良い、次のプロジェクトを実施する。

**① 太平洋諸国・大学生招待計画【継続】**  
太平洋島嶼国の大学生を我が国に招待して、上智大学において日本についての基礎講義を受講する短期間の研修を行う。本年度は2カ国(フィジー共和国1名、ソロモン諸島1名)の大学生計2名を招待する。西インド諸国大学・大学生招待計画(後述)と同時に実施する。

**② 太平洋諸国・記者招待計画 (APIC Journalism Fellowship Program)【継続】**  
本年度は太平洋島嶼国の有力記者2名を招待して、我が国の環境保護・防災・エネルギー利用などについて理解を深め、我が国の現状についての広報を行ってもらう。カリブ諸国・記者招待計画(後述)と同時に実施する。

**③ 太平洋諸国・リーダー招待計画【継続】**  
太平洋島嶼国のリーダーを我が国に招待して、我が国のオビニオン・リーダーとの会談を行うとともに、環境・エネルギー・観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。昨年度、新型コロナウイルス感染症の影響で中止・延期となったサモア独立国副首相兼環境相、ミクロネシア3カ国若手リーダーに加えて、ミクロネシア連邦等のリーダーを年度内に約8名招待予定。

**④ 太平洋青年研修【継続】**  
太平洋諸国の将来を担う可能性のある若手実務者を我が国に招待し、地方自治体を中心に研修を行う。本年はサモア独立国とミクロネシア連邦からの招待を予定している。サモア独立国については、昨年度、新型コロナウイルス感染症の影響で延期となった海士町での研修を行う予定。ミクロネシア連邦については、カリブ青年研修(後述)との合同で、鹿児島県大崎町でのごみ分別処理研修を予定している。

**⑤ 上智大学地球環境学研究所との環境に関するシンポジウム開催【継続】**  
太平洋島嶼国開発協力事業の①と同様のもの。こととし、我が国大学との意見交換会、環境、エネルギー、観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。

**⑥ カリブ青年研修【新規】**  
カリブ諸国の将来を担う可能性のある若手実務者を我が国に招待し、地方自治体を中心に研修を行う。本年はトリニダード・トバゴ共和国の若手実務者に、鹿児島県にある大崎町にてごみ処理についての研修を実施する予定。太平洋青年研修(前述)と合同で実施する予定。

**3. 国際協力に関する講演事業**  
**① APIC 早朝国際情勢講演会【継続】**  
外務省幹部、在外大使による時局の日本の外交課題や激動する国際情勢などについて質の高い内容の話題を提供する講演会。毎月1回(8月を除く)開催予定。  
**② 国際協力懇話会【継続】**  
同様の外交課題・国際情勢等をテーマに小規模の懇話会(東京、及び、地方)を実施する。

**4. 留学生奨学金事業【継続】**  
ザビエル高校(ミクロネシア連邦チューク州)には、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国の最優秀の生徒が入学する。卒業生には、ミクロネシア連邦モリ元大統領を始めとしてそれぞれの国のリーダーを輩出している。上智大学・ザビエル高校・APIC間の協定に基づき発足した「ザビエル高校留学生奨学金制度」では、2014年から2016年は各年1名が入学した。2017年度には従来の協定に変更を加え、一年に最大2名が入学できるようになり、2017年及び2018年には各年2名が入学した。2018年9月には第1期生が卒業し、当制度初めての卒業生を輩出した。2019年には1名が入学したが、諸般の事情で1学期間の休学をすることとなった。本年度は2名が入学する予定である。

**⑤ 太平洋諸国・環境セミナー【継続】**  
我が国からオビニオン・リーダーを太平洋島嶼国に派遣し、我が国が取り組んでいる環境問題等についての講演を行うと共に、その機会を利用して対日理解を深める。本年度は上智大学大学院地球環境学研究所教授2名をミクロネシア連邦チューク州に派遣して、講演会を実施予定。

**⑥ APICとミクロネシア自然保護基金(MCT)との協力事業・ミクロネシア連邦チューク州貯水タンク設置支援【継続】**  
パラオ共和国・ミクロネシア連邦・マーシャル諸島共和国・グアム・北マリアナ諸島の3カ国・2地域は、生物多様性を保全し持続可能な自然資源の利用を図るため、「ミクロネシア・チャレンジ」という共通の環境政策を策定し、環境保護のための資金を積み立てている。この資金の管理を委託されている国際環境財団と Micronesia Conservation Trust(以下、MCT)と APIC は2014年に連携協定を締結して以来、平成27年度はミクロネシア連邦ボンベイ州における豚舎の排泄物処理案件、平成28年度は同州離島における貯水タンク案件、昨年度はMCTを通じて Chuck Conservation Society の海洋保護活動を支援している。

本年度は、現在、深刻な干ばつに悩まされているミクロネシア連邦チューク州ウエノ島の状況に鑑み、MCTを通じてウエノ島に貯水タンクを敷設しようとするものである。併せて、Chuck Women Council(CWC)が住民向けに貯水管理と衛生に関する研修と啓蒙活動の支援を行う。

**⑦ APICとMCTとの協力事業・大学院生支援【継続】**  
長期的に環境に携わる人材育成も意義ある支援であるとの観点からAPIC・MCT上智大学大学院地球環境学研究所留学制度が2017年に創設された。この制度では、MCTからの推薦により、ミクロネシア地域の国籍・市民権を有し、環境の分野に関心のある若者が一年に最大2名、同研究所に入学する。2017年にミクロネシア連邦より2名が初めて入学し、2年後に卒業した。2018年3月には改めて上智大学・MCT・APICの3者間で基本協定が締結され、以降、毎年最大2名の支援を可能にしている。本年度は1名が入学予定である。

**⑧ 上智大学地球環境学研究所との環境に関するシンポジウム開催【継続】**  
上智大学との連携協定に基づいて、これまで環境セミナーを開催してきた国や環境関連団体とのネットワークを構築することとし、上智大学にて2019年に設立された Sophia University Island Sustainability Unit との連携を強化するもの。カリブからの参加者も別途カリブ案件として計上。

**⑨ ナンマル遺跡保存支援事業【継続】**  
ユネスコ世界遺産に登録されたミクロネシア連邦ボンベイ州のナンマル遺跡について、ナンマル遺跡発掘の第一人者である片岡修上智大学客員教授等の協力を得て遺産保存を支援しようとするもの。本年度は、日本政府が「草の根無償」で支援予定のビクターセンター建設の起工式が2019年5月に行われたことを受けて、工事の進捗具合を見つつ案内板の製作を実施する予定。

**⑩ ミクロネシア写真展【継続】**  
記者招待計画のプログラム・コディネーターを依頼している写真家・記者のプロイド・タケウチ氏が撮影したミクロネシア連邦のチューク環礁の写真を用いて写真展を開催する。これまで上智大学、津田塾大学、東洋大学、JICA地球ひろばで開催したほか、日本・ミクロネシア連邦外交関係樹立30周年記念式典にも併設で開催した。本年度はAPICが連携協定を締結し、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会においてミクロネシア連邦のホストタウンにもなった海士町にて開催する予定。

**⑪ 高校生スタディツアー【新規】**  
上智福岡高校が生徒をミクロネシア連邦チューク州に派遣し、ミクロネシア連邦と日本の歴史的なつながりについて理解を深めるとともに、現地において環境問題改善のための取り組みに参加する計画に対して、APICが若い世代の育成の一環として、生徒のホームステイやザビエル高校への訪問等を通して異文化理解を促進することを支援する。ザビエル高校生招待計画(後述)と合わせ、日本とミクロネシア連邦の高校生による相互交流を実現するもの。

**⑫ ザビエル高校生招待計画【新規】**  
APICが奨学金制度で支援しているザビエル高校の生徒4名と引率教職員1名を招待し、上智大学、上智福岡高校及び隠岐島前高校を訪問し、若い世代間での絆の醸成を図る。同大学に対する理解を深めるほか、日本を多角的な視点からとらえ、日本文化や伝統、歴史に対する理解を深める。

**2. 日・カリブ友好協力事業**  
カリブ諸国の信頼関係を構築し、友好関係の一層の推進を図るため、「日・カリブ友好協力基金」を活用して、カリブ諸国の環境、エネルギー及び観光の分野における開発協力事業として、外務省中南米局カリブ室、カリブ共同体(カリコム)、事務省中米局とも協議の上、次のプロジェクトを実施する。

**① 西インド諸国大学・大学生招待計画【継続】**  
西インド諸国大学(UWI)の各校(ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴ共和国のセント・オーガスティン校、バルバドスのケープヒル校、及びオーブンキャンパス)の大学生計4名を我が国に招待して、上智大学において日本についての基礎講義を受講する短期間の研修を行う。太平洋諸国・大学生招待計画と同時に実施する(前述)。

**② カリブ諸国・記者招待計画【継続】**  
本年度はカリブ諸国2名を招待し、我が国の環境保護・防災・エネルギー利用などについて理解を深め、我が国の現状についての広報を行ってもらう。太平洋諸国・記者招待計画と同時に実施する(前述)。

**③ カリブ諸国・リーダー招待計画【継続】**  
カリブ諸国のリーダーを我が国に招待して、我が国のオビニオン・リーダーとの会談を行うとともに、環境・エネルギー・観光に関連する視察を通じて、我が国についての理解を深める。本年度は現地大使館トリニダード・トバゴ共和国、ハイチ共和国、ベリーズからの招待を検討している。

**④ 西インド諸国大学・副総長・学長招待計画【継続】**  
西インド諸国大学(UWI)の副総長(実質的なトップ)及びジャマイカのモナ校の学長を招待する

## 令和2年度収支予算 (簡略版)

収入の部		支出の部	
	令和元年度予算	令和2年度予算	
<b>1. 収入</b>	<b>76,553,000</b>	<b>77,553,000</b>	<b>1. 事業活動支出</b>
a. 基本財産運用収入	3,000	3,000	a. 太平洋島嶼国開発協力事業
b. 特定資産運用収入 (太平洋基金・カリブ基金)	48,000,000	48,000,000	b. 日・カリブ友好協力事業
c. 維持会員会費	19,000,000	20,000,000	c. 早朝講演会事業
d. 受取寄付金	1,500,000	1,500,000	d. 留学生奨学金事業
e. 雑収入	8,050,000	8,050,000	e. 事業間接費
			<b>2. 管理費支出</b>
			a. 役員報酬・給与手当
			b. その他の管理費
<b>当期収入合計</b>	<b>76,553,000</b>	<b>77,553,000</b>	<b>当期支出合計</b>
<b>前期繰越額</b>	<b>438,800,000</b>	<b>413,000,000</b>	<b>次期繰越額</b>
<b>合計</b>	<b>515,353,000</b>	<b>490,553,000</b>	<b>合計</b>

## APICでは維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省幹部・大使による **APIC 早朝国際情勢講演会**を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。  
詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

**場所** ホテルオークラ東京 会議場

**時間** 午前 8:30 ~ 10:00 (朝食付き)

**お問い合わせ**

TEL: 03-5577-2900

EMAIL: [apicinfo@apic.or.jp](mailto:apicinfo@apic.or.jp)

■ **発行人**  
佐藤 嘉恭 (理事長)

■ **発行日**  
令和 2 年 7 月 1 日

■ **発行所**  
一般財団法人 国際協力推進協会 (APIC)  
Association for Promotion of International Cooperation  
〒102-0094  
東京都千代田区紀尾井町 6-12  
紀尾井町福田家ビル 3 階  
TEL: 03-5577-2900 FAX: 03-5577-2901  
EMAIL: [apicinfo@apic.or.jp](mailto:apicinfo@apic.or.jp)  
URL: <http://www.apic.or.jp/>

■ **編集**  
編集長  
副編集長

編集  
APIC インターン生

芳賀 達也 (理事)  
加藤 奈美  
齊藤 拓馬  
喜多 萌子  
金原 弘恭 (国際基督教大学)  
内海 風花 (上智大学)  
松並 佑芽 (創価大学)  
堀田 英一 (テンブル大学ジャパンキャンパス)  
なんべい よりこ